

儀間昭男さんについて

野戦築城隊として、首里城周辺の壕の整備をしていた儀間さんが、戦況を目の当たりにしたのは、軍が南部に撤退する1945年5月27日。「壕を出ると道や交差点のあちこちに死体が折り重なっていた。地獄以外に言いようがない」

3日間ほどかけて糸満市摩文仁に到着すると、サトウキビ畑があり「初めて生きた心地がした」と振り返る。ただ、しばらくすると米軍の攻撃が始まり、辺りは焼け野原に。負傷し、道ばたに倒れ込む日本兵からは「殺してくれ、殺してちょうだい」と懇願されたが「私も人間性を失っていた。ただただ、海岸を目指した」

海岸では、日本兵や住民が身を潜めていた。米兵に囲まれ、投降せざるを得なかった。「死ぬ覚悟はできていた。それが当時の教育。自分だけが生き残り、死んだ友人たちに申し訳なかった」